

泉 鏡 花 集

改
造
社
版

杉浦非水装幀

昭和三年八月二十五日印刷
昭和三年九月一日發行

現代日本文學全集 第十四篇

著者 泉鏡太郎

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇二番

電話芝
(43)

八
四
〇
二
番番番番番

「泉鏡花集」目次

序 卷頭寫眞（照影）
詞（筆蹟）

女 に 高 たか 笈 あし	外 ほか 毘 び 一 ひと 二 ふた 三 さん 四 し	科 か 琵琶 びわ 之 の 之 の 之 の 之 の 之 の 之 の	室 むろ 傳 でん 卷 まき 卷 まき 卷 まき 卷 まき 卷 まき 卷 まき	三 九 九 六 六 四 三
仙 せん 摺 ずり 野 や 草 くさ				五 三 二 一 〇 七
前 まえ				五 九

年譜	（附）隨筆、唄、發句	析 とち の實 み	二 に 三 さん 羽 は 十二 じふに 三 さん 羽 は	眉 まゆ かくしの靈 れい	賣 ばい 色 しき 鴨 かも 南 なん 蟹 かに	南 なん 地 ち 心 こころ 中 ちゆう	歌 うた 行 ぎやう 燈 とう	姉 あね 系 けい 圖 ず （前篇）	姉 あね 系 けい 圖 ず （後篇）	春 はる 畫 え 後 ご 刻 くわく	春 はる 畫 え 畫 え 錄 ろく	續 つづ 紅 こう 雪 せつ 錄 ろく	紅 こう 雪 せつ 羽 う 錄 ろく	白 はく 羽 う 箭 せん 取 とり	藥 くすり 草 くさ 人 ひと 容 よう	親 おや 子 こ 三 さん 人 ひと
五五六		五五三	五四三	五三三	五一二	四八〇	四五二	三八五	三二三	二九七	二七三	二五三	二三四	一八九	一七四	一六九

外科室

上

實は好奇心の故に、然れども予は予が畫師たるを利器として、兎も角も口實を設けつゝ、予と兄弟もたゞならざる醫學士高峰を強ひて、某の日東京府下の一病院に於て、渠が刀を下すべき、貴船伯爵夫人の手術をば予をして見せしむることを儉儀なくしたり。

其日午前九時過ぐる頃家を出で、病院に腕車を飛ばしつ。直ちに外科室の方に赴く時、先方より戸を排してすらくとい來れる華族の小間使とも見ゆる容目妍き婦人二三人と、廊下の半ばに行進へり。

見れば渠等の間には、被布着たる一個七八歳の娘を擁しつ、見送るほどに見えずなれり。これのみならず玄關より外科室、外科室より二階なる病室に通ふあひだの長き廊下には、フロツクコート着たる紳士、制服着たる武官、或は羽織袴の扮装の人物、其他、貴夫人令嬢等いづれも尋常ならず氣高きが、彼方に行進ひ、

此方に落合ひ、或は歩し、或は停し、往復恰も縦るが如し。予は今門前に於て見たる數臺の馬車に思ひ合せて、密かに心に領けり。渠等の或者は沈痛に、或者は憂慮しげに、はた或者は慌しげに、いづれも顔色程ならで、忙しげなる小刻の靴の音、草履の響、一種寂寥たる病院の高き天井と、廣き建具と、長き廊下の間に、異様の蹇音を響かしつゝ、轉た陰慘の趣をなせり。

予はしばらくして外科室に入りぬ。

時に予と相目して、唇邊に微笑を浮べたる醫學士は、兩手を組みて良あをむけに椅子に凭れり。今にはじめぬことながら、殆ど我國の上流社會全體の喜愛に關すべき、この大なる責任を荷へる身の、恰も晚餐の筵に望みたる如く、平然として冷かなること、恐らく渠の如きは稀なるべし。助手三人と、立會の醫博士一人と、別に赤十字の看護婦五名あり。看護婦其者にして、腕に勳章帯びたるも見受けたるが、あるやんごとなきあたりより特に下し給へるもあ

りぞと思はる。他に女性としてはあらざりし。なにがし公と、なにがし侯と、なにがし伯と、皆立會の親族なり。而して一種形容すべからざる面色にて、愁然として立ちたるこそ、病者の夫の伯爵なれ。

室内のこの人々に瞻られ、室外の彼の方々に憂慮はれて、塵をも數ふべく、明るくして、しかも何となく凄まじく侵すべからざる如き觀ある處の外科室の中央に据えられたる、手術臺なる伯爵夫人は、純潔なる白衣を絡ひて、死骸の如く横はれる、顔の色紅くまで白く、鼻高く、頤細りて手足は綾羅にだも堪へざるべし。唇の色少しく褪せたるに、玉の如き前齒兩かに見え、眼は固く閉したるが、眉は思ひなしか蹙みて見られつ。縁に束ねたる頭髮は、ふさ／＼と枕に亂れて、臺の上にこぼれたり。

其かよわげに、且つ氣高く、清く、貴く、美はしき病者の俯を一目見るより、予は懷然として寒さを感じぬ。

醫學士はと、不圖見れば、渠は露ほどの感情をも動かし居らざるものゝ如く、虚心に平然たる狀露れて、椅子に坐りたるは室内に唯渠のみなり。其太く落着きたる、これを頼母しと謂はば謂へ、伯爵夫人の爾き容體を見たる予が眼よ

りは寧ろ心憎きばかりなりしなり。

折からしとやかに戸を拂して、靜にこゝに入來れるは、先刻に廊下にて行逢ひたりし三人の腰元の中に、一際目立ちし婦人なり。

そと貴船伯に打向ひて、沈みたる音調以て、

「御前、姫様はやう／＼お泣き止み遊ばして、別室に大人しう在らつしやいます。」

伯はものいはで領けり。

看護婦は吾が醫學士の前に進みて、

「それでは、貴下。」

「宜しい。」

と一言答へたる醫學士の聲は、此時少しく震を帯びてぞ予が耳には達したる。其顔色は如何にしけむ、俄に少しく變りたり。

さては如何なる醫學士も、驚破といふ場合に望みては、さすがに懸念のなからむやと、予は同情を表したりき。

看護婦は醫學士の旨を領して後、彼の腰元に立向ひて、

「もう、何ですから、彼のことを、一寸、貴下から。」

腰元は其意を得て、手術臺に擦寄りつ。優に膝の邊まで兩手を下げて、しとやかに立禮し、「夫人、唯今、お藥を差上げます。何うぞ其を、

お聞き遊ばして、いろはでも、數字でも、お算へ遊ばしますやうに。」

伯爵夫人は答なし。

腰元は恐る／＼繰返して、

「お開濟でございませうか。」

「あゝ。」とばかり答へ給ふ。

念を推して、

「それでは宜しうございますね。」

「何か、魔酔劑をかい。」

「唯、手術の済みますまで、ちよつとの間でございしますが、御寝なれませんか、不可せんさうです。」

夫人は黙して考へたるが、

「いや、よさうよ。」と謂へる聲は判然として聞えたり。一同顔を見合せぬ。

腰元は諭すが如く、

「それでは夫人、御療治が出来ません。」

「はあ、出来なくつても可いよ。」

腰元は言葉は無く、顧みて伯爵の色を伺へり。伯爵は前に進み、

「奥、そんな無理を謂つては不可ません。出来なくつても可いといふことがあるものか。我儘を謂つてはなりません。」

伯爵はまた傍より口を挟めり。

「餘り、無理をお謂やつたら、姫を連れて來て見せるが可いの。疾く快くならんで何うするものか。」

「はい。」

「それでは御得心でございませうか。」

腰元は其間に周旋せり。夫人は重げなる頭を掉りぬ。看護婦の一人は優しき聲にて、

「何故、其様にお嫌ひ遊ばすの、ちつとも厭なもんぢやございせんよ、うと／＼遊ばすと、直ぐ済んでしまひます。」

此時夫人の肩は動き、口は曲みて、瞬間苦痛に堪へざる如くなりし。半ば目を睜きて、

「そんなに強ひるなら仕方がない。私はね、心に一つ祕密がある。魔酔劑は謔言を謂ふと申すから、それが恐ろつてなりません、何卒もう、眠らずにお療治が出来ないやうなら、もう／＼快らんでも可い、よして下さい。」

聞くが如くんば、伯爵夫人は、意中の祕密を夢現の間に人に吐かむことを恐れて、死を以てこれを守らむとするなり。良人たる者がこれを聞ける胸中いかん。此言をしてもし平生にあらしめば必ず一條の紛紜を惹起すに相違なきも、病者に對して看護の地位に立てる者は何等のことも之を不問に歸せざるべからず。然も吾

が口よりして、あからさまに秘密ありて人に聞かしむることを得ずと、臨手として謂出せる、夫人の胸中を推すれば、

伯爵は温手として、

「私にも、聞かされぬことなにか。え、奥、」

「はい、誰にも聞かすことはなりません。」

夫人は決然たるものありき。

「何も魔解劑を嗅いだからつて、謠言を謂ふといふ、極つたことも無さうぢやの。」

「否、このくらゐ思つて居れば、屹と謂ひますに違ひありません。」

「そんな、また、無理を謂ふ。」

「もう、御免下さいまし。」

投棄つるが如く恚謂ひつゝ、伯爵夫人は寢返りして、横に背かむとしたりしが、病める身のまゝならで、齒を鳴らす音聞えたり。

ために顔の色の動かさざる者は、唯彼の醫學士一人あるのみ。渠は先刻に如何にしけむ、一度其平生を失せしが、今やまた自若となりたり。

侯爵は満面造りて、

「貴船、こりや何でも姫を連れて来て、みせることぢやの、なんぼでも兄の可愛きには我折れよう。」

伯爵は頷きて、

「これ、錢。」

「は。」と腰元は振返る。

「何を、姫を連れて来い。」

夫人は堪らず遮りて、

「錢、連れて来んでも可い。何故、眠らなけりや、療治は出来ないか。」

看護婦は窮したる微笑を含みて、

「お胸を少し切りますので、お動き遊ばしちやあ、危険でございます。」

「なに、私や、ぢつとして居る。動きやあしな

いから、切つておくれ。」

予は其餘りの無邪氣さに、覺えず森寒を禁じ得ざりき。恐らく今日の切開術は、眼を開きてこれを見るものあらじと思へるをや。

看護婦はまた謂へり。

「それは夫人、いくら何でも些少はお痛み遊ばしませうから、爪をお取り遊ばすとは違ひますよ。」

夫人はこゝに於てばつちりと眼を睜けり。氣

もたしかになりけむ、聲は凜として、

「刀を取る先生は、高峰様だらうね！」

「はい、外科々長です。いくら高峰様でも痛くなくお切り申すことは出来ません。」

「可いよ、痛かあないよ。」

「夫人、貴下の御病氣は其様な手輕いのではありません。肉を殺いで、骨を削るのです。ちつとの間御辛抱なさい。」

臨検の醫博士はいまはじめて恚謂へり。これ到底關雲長にあらざるよりは、堪へ得べきことにあらず。然るに夫人は驚く色なし。

「其事は存じて居ります。でもちつともかまひません。」

「あんまり大病なんで、何うかしをつたと思はれる。」

と伯爵は愁然たり。侯爵は傍より、

「兎も角、今日はまあ見合すとしたら何うぢやの。後でゆつくりと謂聞かすが可からう。」

伯爵は一議もなく、衆皆これに同ずるを見て、彼の醫博士は遮りぬ。

「一時後れては取返しがありません。一體、あなた方は病を輕蔑して居らるゝから埒あかん。感情をとかやかくいふのは好息です。看護婦一寸お押へ申せ。」

いと嚴なる命の下に五名の看護婦はバラバラと夫人を圍みて、其手足とを押しむとせり。

渠等は服従を以て責任とす。單に、醫師の命をだに奉ずれば可し、敢て他の感情を顧ること

を要せざるなり。

「綾！来ておくれ。あれ！」

と夫人は絶入る呼吸にて、腰元を呼び給へば、慌てゝ看護婦を遮りて、

「まあ、一寸待つて下さい。夫人、何うぞ、御堪忍遊ばして。」と優しい腰元はおろ／＼聲。

夫人の面は蒼然として、

「何うしても背きませんか。それぢや全快つても死んでしまひます。可いから此儘で手術をなさいと申すのに。」

と眞白く細き手を動かし、辛うじて衣紋を少し寛げつゝ、玉の如き胸部を顯し、

「さ、殺されても痛かあない。ちつとも動きやしないから、大丈夫だよ。切つても可い。」

決然として言放てる、辭色ともに動かすべからず。さすが高位の御身とて、威厳あたりを拂ふにぞ、満堂齊しく聲を呑み、高き咳をも漏らさずして、寂然たりし其瞬間、先刻より些との身動きだもせず、死灰の如く、見えたる高峰、

軽く身を起して椅子を離れ、
「看護婦、刀を。」

「え。」と看護婦の一人は、目を睜りて猶豫へり、一同齊しく愕然として、醫學士の面を瞻する時、他の一人の看護婦は少しく震へながら、消毒したる刀を取りてこれを高峰に渡したり。

醫學士は取ると其まゝ、靴音軽く歩を移して、術と手術臺に近接せり。

看護婦はおど／＼しながら、
「先生、このまゝでいいんですか。」

「あゝ、可いだらう。」

「ぢやあ、お押へ申しませう。」

醫學士は一寸手を舉げて、軽く押留め、

「なに、それにも及ぶまい。」

謂ふ時疾く其手は既に病者の胸を掻開けたり。夫人は兩手を肩に組みて身動きだもせず。

怒りし時醫學士は、誓ふが如く、深重嚴肅なる音調もて、

「夫人、責任を負つて手術します。」

時に高峰の風采は一種神聖にして犯すべからざる異様のものにてありしなり。

「何うぞ。」と一言答へたる、夫人が蒼白なる兩頬に刷けるが如き紅を潮しつ。ちつと高峰

を見詰めたるまゝ、胸に臨める銳刀にも眼を塞がむとはなさざりき。

唯見れば雪の寒紅梅、血汐は胸よりつと流れて、さと白衣を染むるとともに、夫人の顔は舊

の如く、いと蒼白くなりけるが、果せるかな自若として、足の指をも動かさざりき。

ことのこゝに及べるまで、醫學士の舉動脱兎

の如く神速にして聊か間なく、伯爵夫人の胸を割くや、一同は素より彼の醫博士に到るまで、言を挟むべき寸隙とてもなかりしなるが、ここに於てか、わな／＼くあり、面を蔽ふあり、背向になるあり、或は首を低るゝあり、予の如き、我を忘れて、殆ど心臓まで寒くなりぬ。

三秒にして葉が手術は、ハヤ其佳境に進みつゝ、刀骨に達すと覺しき時、

「あ。」と深刻なる聲を絞りて、二十日以来寢返りさへも得せずと聞きたる、夫人は俄然器械の如く、其半身を跳起きつゝ、刀取れる高峰が右手の腕に兩手を確と取纏りぬ。

「痛みますか。」

「否、貴下だから、貴下だから。」

恠言懸けて伯爵夫人は、がつくりと仰向きつゝ、凄冷極り無き最後の眼に、國手をちつと瞻りて、

「でも、貴下は、貴下は、私を知りますまい！」

謂ふ時晩し、高峰が手にせる刀に片手を添へて、乳を下深く掻切りぬ。醫學士は眞若になりて戦きつゝ、

「忘れません。」

其聲、其呼吸、其姿、其聲、其呼吸、其姿、伯爵夫人は嬉しげに、いとあどけなき微笑を含

みて高峰の手より手をはなし、ぼつたり、枕に伏すとぞ見えし、唇の色變りたり。其時の二人が狀、恰も二人の身邊には、天なく、地なく、社會なく、全く人なきが如くなりし。

下

數ふれば、はや九年前なり。高峰が其頃は未だ醫科大學に學生なりし砌なりき。一日予は渠とともに、小石川なる植物園に散策しつ。五月五日躑躅の花盛なりし。渠とともに手を携へ、芳草の間を出つ、入りつ、園内の公園なる池を繞りて、咲揃ひたる藤を見つ。

歩を轉じて彼處なる躑躅の丘に上らむとて、池に添ひつゝ歩める時、彼方より來りたる、一群の觀客あり。

一個洋服の扮装にて煙突帽を戴きたる蕃鬻の漢先衛して、中に三人の婦人を圍みて、後よりもまた同一様なる漢來れり。渠等は貴族の御者なりし。中なる三人の婦人等は、一様に深張の涼傘を指翳して、裾拂の音最妙かに、するゝと練來れる、ト行違ひざま高峰は、思はず後を見返りたり。

「見たか。」

高峰は頷きぬ。「む。」

恠て丘に上りて躑躅を見たり。躑躅は美なりしなり。されど唯赤かりしのみ。

傍のベンチに腰懸けたる、商人體の壯者あり。

「吉さん、今日はいいことをしたぜなあ。」

「さうさね、偶にやお前の謂ふことを聞くも可いかな、淺草へ行つて此處へ來なかつたらうもんなら、拜まれるんぢやなかつたつけ。」

「何しろ、三人とも揃つてらあ、どれが桃やら櫻やらだ。」

「一人は圓鬚ぢやあないか。」

「何の道はや御相談になるんぢやなし、圓鬚でも、東髪でも、乃至しやぐまでも何でも可い。」

「ところで、あの風ぢやあ、是非、高島田に來る處を、銀杏と出たなあ何ういふ氣だらう。」

「銀杏、合點がいかにかい。」

「え、わりい洒落だ。」

「何でも、貴始方がお忍びで、目立たぬやうにといふ肚だ。ね、それ、眞中のに水際が立つたらう。いま一人が影武者といふのだ。」

「そこでお召物は何と踏んだ。」

「藤色と踏んだよ。」

「え、藤色とばかりぢや、本讀が納まらねえぜ。」

足下のやうでもないぢやないか。」

「眩くつてうなだれたね、おのづと天窓が上らなかつた。」

「そこで帶から下へ目をつけたらう。」

「馬鹿をいはつし、勿體ない。見しやそれとも分かぬ間だつたよ。あゝ、殘惜い。」

「あのまた、歩行振といつたらなかつたよ。唯もう、すうツとかう霞に乗つて行くやうだつけ。」

裾拂、棲はづれなんといふことを、なるほど、見たは今日が最初よ。何うもお育柄はまた格別違つたもんだ。ありやもう自然、天然と雲上になつたんだな。何うして下界の奴儕が眞似ようたつて出来るものか。」

「酷いふな。」

「ほんのこのつだが私やそれ御存じの通り、北廓を三年が間、金毘羅様に斷つたといふもんだ。

處が、何のこゝとあない。肌守を懸けて、夜中に土堤を通らうぢやあないか。罰のあたらないのが不思議さね。もう、今日といふ今日は發心切つた。あの醜婦ども何うするものか。見なさい、アレ、ちらほらとかう其處いらに、赤いものがちらつくが、何うだ。まるでそら、芥塵か、蛆が蠢めいて居るやうに見えるぢやあないか。馬鹿々々しい。」

「これはきびしいね。」

「串戯ぢやない。あれ見な、やつぱりそれ、手があつて、足で立つて、着物も羽織もぞろりとお召で、おんなじ様な編蝠傘で立つてゐる處は、憚りながらこれ人間の女だ、然も女の新造だ。女の新造に違ひはないが、今拜んだのと較べて、何うだい。まるでもつて、くすぶつて、何といつて可い汚れ切つて居らあ。あれでもおんなじ女だつさ、へむ、聞いて呆れらい。」

「おや、何うした大變なことを謂出したぜ。しかし全くだよ。私もさ、今まではかう、ちよいとした女を見ると、ついそのなんだ。一所に歩くお前にも、随分迷惑を懸けたつが、今のを見てからもう胸がすつきりした。何だかせいゝとする、以來女はふつりだ。」

「それぢやあ生涯ありつけまいぜ。源吉とやら、みづからは、とあの姫様が、言ひさうなものからね。」

「罰があたたらあ、あてこともない。」

「でも、あなたやあ、と來たら何うする。」

「正直な處、私は遁げるよ。」

「足下もか。」

「え、君は。」

「私も遁げるよ。」と目を合せつ。しばらく言

途絶えたり。

「高峰、ちつと歩かうか。」

予は高峰と共に立上りて、遠く彼の壯俊を離れし時、高峰はさも感じたる面色にて、

「あゝ、眞の美の人を動かすことあの通りさ、君はお手のものだ、勉強し給へ。」

予は畫師たるが故に動かされぬ。行くこと數百歩、彼の樟の大樹の鬱蒼たる木の下蔭の、稍薄暗きあたりを行く藤色の衣の端を遠くよりちらとぞ見たる。

園を出づれば丈高く肥えたる馬二頭立ちて、磨硝子入りたる馬車に、三個の馬丁休らひたりき。其後九年を経て病院の彼のことありしまで、高峰は彼の婦人のことにつきて、予にすら一言をも語らざりしかど、年齢に於ても、地位に於ても、高峰は至あらざるべからざる身なるにも關らず、家を納むる夫人なく、然も渠は學生たりし時代より品行一層謹嚴にてありしなり。予は多くを謂はざるべし。

青山の墓地と、谷中の墓地と所こそは變りたれ、同一日に前後して相違けり。

語を寄す、天下の宗教家、渠等二人は罪惡ありて、天に行くことを得ざるべきか。

蓑着て通る

蓑きて通る、笠きて通る。

こん／＼蛇の日、流蛇の目。

繪日傘日傘。

坊やがさした繪日傘、日傘でお天氣。

——鏡花全集卷十五（頃）より

琵琶傳

新婦が、床杯をなさむとて、座敷より休息の室に開ける時、介添の婦人は不圖其顔を見

て驚きぬ。而貌殆ど生色なく、今にも僵れむばかりなるが、ものに激したる状なるにぞ、介添は心

許なげに、つい居て着換を捧げながら、「もし、御氣分でも悪いのぢやございませんか。」

と聲を密めてそと問ひぬ。新婦は凄冷なる眸を轉じて、介添を顧みつ。「何。」

とばかり簡単に言捨てたるまゝ、身さへ眼をさへ動かさず、一心唯思ふことある其一方を見詰めつゝ、衣を換ふるも、帯を緊むるも、衣紋を直すも、袂を揃ふるも、皆他の手に打任せ

つ。尋常ならぬ新婦の氣色を危みたる介添の、何かは知らずおどししながら、

「此方へ。」

と謂ふに任せ、渠は少しも躊躇はで、静々と歩を廊下に運びて、やがて寢室に伴はれぬ。

床にはハヤ良人ありて、新婦の来るを待ち居れり。渠は名を近藤重隆と謂ふ陸軍の尉官なり。式は別に謂はざるべし、媒妁の妻退き、介添の婦人皆罷出つ。

唯二人、閨の上に相對し、新婦は屹と身體を固めて、端然として坐したるまゝ、まおもてに良人の面を睨りて、打解けたる状毫もなく、はた駭らへる風情も無かりき。

尉官は腕を拱きて、こもまた和きたる體あらず、殆ど五分時ばかりの間、互に眼と眼を見合せしが、遂に良人先づ肅びたる聲にて、「お通。」

とばかり呼懸けつ。新婦の名はお通ならむ。呼ばるゝに應へて、「唯。」

とのみ。渠は判然とものいへり。

尉官は太く苛立つ胸を、強ひて落着けたらむ如き、沈める、力ある音調もて、「汝、よく娶たな。」

お通は少しも口籠らで、「何うも詮方がございせん。」

尉官は少時黙しけるが、稍其聲を高うせり。「おい、謙三郎は何うした。」

「息災で居ります。」

「よく、汝、別れることが出来たな。」

「詮方がないからです。」

「何故詮方がない。うむ。」

お通はこれが答をせて、懷中に手を差入れて一通の書を取り出し、良人の前に繰廣げて、兩手を膝に正してき。尉官は右手を差伸し、身近に行燈を引寄せつゝ、眼を定めて讀みおろしぬ。

文字は蓋し左の如きものにてありし。お通に申殘し参らせ候、御身と近藤重隆殿とは計嫁に有之候

然るに御身は殊の外彼の人を忌嫌ひ候様子、拙者の眼に相見え候へば、女ながらも其由のいひ聞け難くて、臨終の際まで黙し候

さ候へども、一日親戚の儀を約束いたし候へば、義理堅かりし重隆殿の先人に對

し面目なく、今さら變替相成らず候あ
はれ繼姓となりて拙者の名のために彼の
人に身を任せ申さるべく、斯の遺言を認
め候時の拙者が心中の苦痛を以て、御
身に謝罪いたし候

月日 清川通知

二度三度繰返して、尉官は答を更めたり。

「通、吾は良人だぞ。」

お通は聞きて兩手を支へぬ。

「唯、貴下の妻でございます。」

爾時尉官は傲然として俯向けるお通を瞰下し

「吾のいふことには、汝、屹と従ふであらう

な。」

此方は頭を低れたるまゝ、

「否、お従はせなさなければ不可ません。」

尉官は眉を動かしぬ。

「ふむ。しかし通、吾を良人とした以上は、汝、

妻たる節操は守らうな。」

お通は屹と面を上げつ、

「いゝえ、出来さへすれば破ります。」

尉官は怒氣心頭を衝きて烈火の如く、

「何だ！」

と其言を再びせしめつ。お通は怯めず、臆す
る色なく、

「はい。私に、私に、節操を守らねばなりま

せんと謂ふ、そんな義理はございせんから、

出来さへすれば破ります！」

恐氣もなく言放てる、片頬に微笑を含みた

り。

尉官は直ちに頷きぬ。胸中豫めこの算あ

りけむ、熱の極は冷となりて、ものいひもいと

靜に、

「應、屹と節操を守らせるぞ。」

渠は唇頭に嘲笑したりき。

二

相本謙三郎は唯一人清川の書齋に在り。當所

もなく室の一方を見詰めたるまゝ、默然として

物思へり。渠が書齋の縁前には、一個數寄を盡

したる鳥籠を懸けたる中に、一羽の純白なる鸚

鵒あり、餌を啄むにも飽きたりけむ、もの淋し

げに謙三郎の後姿を見遣りつゝ、頭を左右に

傾け居れり。一室寂たること頃刻なりし、謙三

郎は其清秀なる面に鸚鵒を見向きて、太く物案

ずる狀なりしが、憂ふる如く、危む如く、はた

人に憚ることあるものゝ如く、「琵琶。」と一聲、

鸚鵒を呼べり。琵琶とは蓋し鸚鵒の名ならむ。
低く口笛を鳴すとひとしく、

「ツウチャン、ツウチャン」

と叫べる聲、奥深きこの書齋を徹して、一種

の音調打響くに、謙三郎は悠然として、思はず

涙を催しぬ。

琵琶は年久しく清川の家に養はれつ。お通と

渠が從兄なる謙三郎との間に處して、巧みに其

情交を暖めたりき。他なし、お通が此家の愛

女として、室を隔てながら家を整したりし頃、

未だ近藤に嫁がざりし以前には、謙三郎の用あ

りて、お通に見えむと欲することある毎に、今

しも渠がなしたる如く、籠の中なる琵琶を呼び

て、爾く口笛を鳴すとともに、琵琶が玲瓏たる

聲をもて、「ツウチャン、ツウチャン」と傳令す

べく、よく馴らされてありしかば、此時の如く

聲を擧げて二たび三たび呼ぶとともに、帳内深

き處肅として物を縫ふ女、物差を棄て、針を

拵きて、直に謙三郎に來りつゝ、笑顔を合すが

例なりしなり。

今やなし。あらぬを知りつゝ謙三郎は、日に

幾回、夜に幾回、果敢なきこの兒戲を繰返す

ことを禁じ得ざりき。

さて其頃は、征清の出師ありし頃、折は恰

も豫備後備に對する召集令の發表されし折なりし。

謙三郎もまた我國徵兵の令に因りて、豫備兵の籍にありしかば、一週日以前既に一度聯隊に入營せしが、其月其日の翌日は、旅團戰地に發するとして、親戚父兄の心を察し、一日の出營を許されたるにぞ、渠は父母無き孤兒の、他に繁累とはあらざれども、兒として幼少より養育されて、母とも思ふ叔母に會して、永き離別を惜まむため、朝來こゝに來り居り、聞くこともはた謂ふことも、永き夏の日に盡きざるに、歸營の時限迫りたれば、謙三郎は、ひしひしと、戎衣を裝ひ、將に辭し去らむとして躊躇しつ。

書齋に品あり、衣兜に容るゝを忘れたりとして既に玄關まで出でたる身の、一人書齋に引返しつ。

叔母と其奴婢の輩は、皆玄關に立併びて、いづれも面に愁色あり。彈丸の中に行く人の、今にも來ると待ちけるが、五分を過ぎ、十分を経て、なほ書齋より來らざるにぞ、謙三郎は如何にせしと、心々に思へる折から、寂として廣き家の、遙奥の方よりおとづれきて、

「ツウチャン、ツウチャン」

と鸚鵡の聲、聞き馴れたる叔母の此時のみ何思ひけむ色をかへて、急がはしく書齋に到れり。

謙三郎は慣習に命じて、お通の名をば呼ばしめしが、來るべき人のあらざるに、平時の事とはいひながら、あすは戰地に赴く身の、再び見、再び聞き得べき聲にあらねば、意を決したる首途にも、渠はそらに涙ぐみぬ。時に縁側に登音あり。女々しき風情を見られまじと、謙三郎の立ちたる時、叔母は早くも此方來りて、突然鳥籠の蓋を開けつ。驚き見る間に羽ばたき高く、琵琶は籠中を逸し去れり。

「おや！何をなさいます。」

と謙三郎はせはしく問ひたり。叔母は此方を見も返らず、琵琶の行方を瞻りつゝ、縁側に立ちたるが、あはれ消沈る樹間の雪か、綠翠暗きあたり白き鸚鵡の見え隠れに、蝸一聲鳴きける時、手を以て涙を拭ひつゝ、徐に謙三郎を顧みたり。

「いゝえね、未練が出ちやあ悪いから、もうあの聲を聞くなと思つて……」

叔母は涙の聲を飲みぬ。

謙三郎は羞ちたる色あり。これが答は爲さず

して、胸の間の鈕釦を懸けつ。

「左様なら参ります。」

とつかくゝと書齋を出でぬ。叔母は引添ふ如くにして、其左側に從ひつゝ、歩みながら口早に、

「可いかい、先刻謂つたことは違へやしまいね。」

「何ですか。お通さんに逢つて行けとおつしやつた、あのことでですか。」

謙三郎は立留りぬ。

「あゝ、そのことも、お前、軍に行くといふ人に他に願があるものかね。」

「其は困りましたな。彼處までは五里あります。今朝だと腕車で駈けて行つたんですが、到底逢はせないといひますから行かうといふ氣ありませんでした。今ツからぢや、もう時間がございせん。三十分間、兵營までさへ大急でございせん。」

飛んだ長座をいたしました。」

謂ふことを聞きも果てず、叔母は少しく急ぎ込みて、

「其言は聞いたけれど、女の身にもなつて御覽、如彼田舎へ推込まれて、一年越外出も出来ず、折があつたらお前に逢ひたい一心で、細々命を繋いで居るもの、顔も見せないで行かれち

やあ、其こそ彼女は死んでしまふよ。お前も餘り察しがない。」

と戎衣を捉へて放たざるに、謙三郎は困じつつ、

「左様おつしやるも無理ではございせんが、もう今から逢ひますには、脱營しなければなりません。」

「は、脱營でも何でもおし。通が私や可哀さうだから、よう、後生だから。」

と片手に戎衣の袖を捉へて、片手に拜むに身もよもあらず、謙三郎は着くなりて、

「何、私の身は何うならうと、名譽も何も構ひませんが、其では、其では何うも國民たる義務が缺けますから。」

と誠心籠めたる強き聲音も、いかでか叔母の耳に入るべき。只管頭を打掉りて、

「何が缺けようとも構はないよ。何が何でも可いんだから、これ唯た一目、後生だ。頼む。達つて行つてやつておくれ。」

「でも其だけは。」

謙三郎のなほ辭するに、果は怒りて血相かへ、

「えゝ、何ういつても肯かないのか。私一人だから可いと思つて、伯父さんがおいでの時なら、

そんなこと、いはれやしいが。え、お前何時も口癖のやうに何とおいひだ。屹と養育された恩を返しますツて、立派な口をきく癖に。私がこれほど頼むものを、それぢやあ義理が済まいが。餘りだ、餘りだ。」

謙三郎は如何とも辯疏なすべき言を知らず、少時沈思して頭を低れしが、叔母の背をば搔撫つゝ、

「可うございます。何とでもいたして屹と逢つて参りませう。」

謂はれて叔母は振何向き、さも嬉しげに見えるが、謙三郎の顔の色の尋常ならざるを危みて、

「お前、可いのかい。何ともありやしないかね。」

「否、お憂慮には及びません。」

といと淋しげに微笑みぬ。

三

「奥様、何處へござらつしやる。」

と不意に背後より呼留められ、人は知らずと忍び出で、今しも漸う戸口に到れる、お通はハツと吐胸をつきぬ。

されども渠は聞かざる眞似して、手早く鎖を

外さむとなしける時、手燭片手に駈出で、無手と帶際を引捉へ、掴戻せる老人あり。

頭髪恰も銀の如く、額元げて、髯まだらに、いと厳めしき面構の一癖あるべく見えけるが、のぶとき聲にてお通を呵り、

「夜夜中あてことも無え駄目なこつた、斷念させい。三原傳内が眼張つてれば、びくともさせるこつちやあ無え。眼を眩まさうとつてそりや駄目だ。何の戸外へ出すものか。此方へござれ。えゝ、此方ござれと謂ふに。」

お通は屹と振り返り、

「お放し、私が一寸戸外へ出ようとするのを、何のお前がお構ひでない、お放しよ、えゝ！お放してば。」

「なりましねえ。麻畑の中へ行つて逢はうたツて、さうは行かねえ。素直に此方へござれツていに。」

お通は肩を動かさぬ。

「お前、主人を何うするんだえ。些少出過ぎやしないかね。」

「主人も絲瓜もあるものか、吾は何でも重隆様のいひつけ通りに屹と勤めりや其で可いのだ。お前様が何と謂つたつて耳にも入れるものぢやねえ。」

「邪険も大抵にするものだ。お前あんまりぢやないかね。」

とお通は黒く艶かな瞳を以て老夫の顔をじろりと見た。傳内はビクともせず、

「邪険でも因業でも、吾、何にも構はねえだ。旦那様のおつしやる通り屹と勤めりや其で可いのだ。」

威を以て制することならずと見たる、お通は少しく氣を和らげ、

「しかしねえ、お前、其處には人情といふものがあるわね。まあ、考へて見ておくれ。一昨日の晩はじめて門をお敞きなすつてから、今夜で丁ど三晩の間、むかうの麻痺の中に隠れておいでなすつて、めしあがるものといつちや、一粒の御飯もなし、内に居てさへひどいものを、ま、蚊や蛸で何んなだらうねえ。脱營をなすつたつて。もう、お前も知つてゐる通り、今朝つかまりなさりや其ツ切ぢやあ無いか。何の、一寸ぐらゐ顔を見せたからつて、見たからつて、お前、この夜中だもの、ね、お前この夜中だもの、旦那に知れツこはありやしないよ。でもそれでも料簡がならなけりやお前でも可い、お前でも可いからね、實はあの隠れ忍んで、や

うやう拵へたこの召食事をそつと届けて来ておくれ、よ、後生だよ。私に一目逢はうとつて其位に辛抱遊ばす、それを私の身になつちやあ、ま、どんなだらうとお思ひだ。え、後生だからさ、もう、私や居ても、起つても、居られやしないよ。後生だからさ、一寸届けて来ておくれなね。」

傳内は唯頭を掉るのみ。

「何を謂はツしても駄目なこんだ。そりや、は、連も駄目でござる。こんなことがあらうと思はつしやればこそ、旦那様が扶持い着けて、お前様の番をさして置かつしやるだ。」

お通はいとも切なき聲にて、

「さ、さ、其ことは聞えただれど……あゝ、何といつて頼みやうもない。一層お前、わ、私の眼を潰しておくれ、さうしたら顔を見る夢慮もあるまいから。」

「そりや不可えだ。何でも、は、お前様に氣を着けて、蛋にもさへせるなといふ、おつしやりつくだアもの。眼を潰すなんてあてごともない。飛んだことをいはつしやる。其にしてもお前様眼が見えねえでも、口が利くだ。何でも、はあ、一切、男と逢はせることゝ、話談をさせること

がならねえといふ、旦那様のおつしやりつくだ。」

斷念めてしまはつしやい。何といつても駄目でござる。」

お通は胸も張裂くばかり、「えゝ」と叫びて、身を震はし、肩をゆりて、

「イ、一層、殺しておしまひよう。」

傳内は自若として、

「これ、またあんな無理を謂ふだ。蛋にも喰はすことのならねえものを、何として、は、殺せるこんだ。さ駄々を捏ねえで此方へござれ。ひどい蚊だがなう。お前様アくはねえか。」

「えゝ、蚊がくふ處のことぢやないわね。お前も餘り因業だ、因業だ、因業だ。」

「なに其、いはつしやるほど因業でもねえ。此家をめざしてからに、何遍も探偵が遣つて来るだ。はい、麻痺と謂つてやりや、即座に捕まへられて、吾も、はあ、夜の目も合はさねえで、お前様を見張るには及ばずかい、御褒美も貰へるだ。けんどもが、何も旦那様あ、訴人をしろと謂ふ、いひつけはしなさらねえだから、吾知らねえで、押通しやさ。そん代にやあまた、いひつけられたことはハイ一寸もずらさねえだ。何でも戸外へ出すことはなりましねえ。腕づくでも逢はせねえから、さう思つてくれさつしやい。」

お通はわつと泣出しぬ。

傳内は眉を顰めて、

「あれ、泣かあ。何時もねえことに何うしたぞ。

お前様婚禮の晩床入もしねえで其場ツから此方

へ追出されて、今ぢや月日も一年越男猫も抱

かないで内にばかり。敷居も跨がすなといふい

ひついで、吾に眼張つとれといふこんだから、

吾や、お前様の、心が思ひやらるゝで、見て居

るが辛いでの、何様に斷らうと思つたか知ん

えけん、今の旦那様三代めで、代々養はれた

老夫だが、横のものをば縦様にしろと謂はれた

處で従はなかりやなんねえので、畏つたこと

は畏つたが、さてお前様が嘔泣續けるこんだ

らうと、生命が縮まるやうに思つた。すると

案じるより産が安いで、長い間かうやつて一所

に居るが、お前様の斷念の可いには魂消たね。

思ひなしか、氣のせむか、段々窶れるやうには

見えるけん、つひぞ膝も崩した事なし、整然

として威勢がよくつて、吾、はあ、ひとりでに

天窓が下るだ、はてこゝいらは、田舎も田舎だ。

何處に居た處で何の樂もねえ老夫でせえ、つ

まらねえことと思つて、氣が減入るに、お前

様は、えらい女だ。面壁イ九年とやら、悟つた

ものだと我あ折つて居たんだがさ、藥袋もない

ことが湧いて来て、お前様つひぞ見たこともね

え泣かつしやるね。御心中のウ察しねえでもね

えけん、旦那様にやあ、代へられましねえ。

はて、お前様の様でもねえ。斷念めてしまはつ

しやい。何の道斯う謂ひ出したからにやいくら

泣いたつてそりや駄目さ。」

然り親仁のいひたる如く、お通は今に一年間、

幽閉されたこの孤屋に處して、涙に、口に、

はた容儀、心中の其痛苦を語りしと絶えてあ

らず。修容正肅殆んど端睨すべからざるもの

ありしなり。されど一たび大磐石の根の覆る

や、小石の轉ぶが如きものにあらず。三晝夜麻

痺の中に蟄伏して、一たび其身に會せむため、

一粒の飯をだに口にせで、却りて濕蟲の餌とな

れる、意中の人の窮苦には、泰山と雖も動かで

止むべき、お通は轉倒したるなり。

「そんなに解つて居るのなら、一寸の間、大

眼に見ておくれ。」

と前後も忘れて身をあせるを、傳内聊も手

を弛めず、

「はて、自分のねえ、何ういふものだね。」

お通は涙にむせりながら、

「えゝ、自分がなくつても可いよ、お放し、放

しなつてば、放しなよう。」

「是非とも背かなけりや、うぬ、ふん縛つて、

動かさねえぞ。」

と傳内は一呵せり。

宜しこそ、近藤は、執着の極、婦人をして我

に節操を盡さしめむか、終生空閑を護らしめ、

おのれ一分時も其傍にあらざして、なほよく節

操を保たしむるにあらざるよりは、我に貞なり

とはいふことを得ずとなし、はじめよりお通の

我を嫌ふこと、蛇蝎もたぐひならざるを知りなが

ら、恰も渠に魅入りたらむ如く、進退隙なく附

絡ひて、遂にお通と謙三郎とが既に成立せる戀

を破りて、おのれ犠牲を得たりしにもかゝらは

ず、從兄妹同士が戀愛のいかに強きかを知れる

より、嫉妬の餘、奸淫の念を節し、當初婚姻の

夜よりして、食をともにせざるのみならず、一

度も來りて其妻を見しことあらざる、孤屋に幽

閉の番人として、この老夫をば擇びたれ。お通

は止むなく死力を出して、何時傳内とすまひし

が、風に堪へざるかよき婦人の、憂にやせ

たる身を以て、いかで健腕に敵し得べき。

手もなく奥に引立てられて、其まゝ其處に押

据ゑられつ。

たとひいかなる手段にても到底この老夫をし

て我に忠ならしむることの能はざるをお通は斷